

発表題目：19 世紀のサハラ北西部におけるキャラヴァンと植民地権力——フランス支配下の
スーフ商人に注目して——

所属：京都大学大学院 文学研究科 現代史学専修

氏名：天野 佑紀

1200 字程度で発表内容を記載してください。

前近代アラブおよびヨーロッパの著述家は、アフリカ大陸北方に位置するサハラ砂漠（以下、サハラ）を「不毛の地」とみなし、そのまた南方に住む人々の世界を「黒人たちの国々」「黒アフリカ」と呼んだ。帝国主義時代の西欧列強は、かかる素朴な地理認識を現実の政策に適用し、サハラを南北に分け合うようにアフリカ分割を進めた。かくして形成された各植民地の版図は、独立後のアフリカ諸国に継承され、「北アフリカ」と「サブサハラ・アフリカ」という現代の二分法的なアフリカ認識の土台となっている。この地域区分に沿った歴史は、しばしば人口の集中する地域（「北アフリカ」でいえば地中海沿岸部）を中心に描かれ、そこではサハラが等閑視されてきた。

とはいえ、歴史的にみればサハラは、点在するオアシスを拠点に多様な人々が生き、そこで展開するヒト・モノの移動を通じてアフリカの南北を繋ぐ空間でもあった。かつて多くの歴史家が、西アフリカ・サヴァンナ地帯の品（金・黒人奴隷など）を地中海世界にもたらした「サハラ越え交易」に注目したが、文字通りサハラを「越え（trans）」た南北交流の記述に終始したため、結果的にサハラそのものを空白地帯とし、期せずして上記の二分法的なアフリカ認識を助長していた。それに対して近年の研究では、従来の地域区分に囚われない、「サハラそれ自体」の歴史を描こうとする向きが強まっている。すなわち、サハラに生きた主体への着目から、サハラ内部で完結する交易やオアシス農業の動態が明らかにされ、それまで南北アフリカを直線的に繋いだかのように表象されてきた「サハラ越え交易」についてもまた、ローカルな商品交換の連鎖のなかから捉え直されているのである。しかし、そこでは植民地化以前のサハラの地域的な一体性が強調されるあまり、二分法的なアフリカ認識を現実のものとした植民地支配がこの地の社会に及ぼした影響については十分に議論されていない。

そこで本報告は、19 世紀の植民地分割とそれに基づく領域支配がこの地に及んだことの意味について、サハラ北西部（現在のアルジェリア東部）に位置するオアシス群スーフの事例から検討する。スーフに拠点を置いた遊牧部族は、物資（穀物・オリーブなど）や労働力（黒人奴隷）を同地にもたらず長短さまざまな距離の交易を通じて地域経済に強い影響力を有した。一方のフランスは、1830 年のアルジェリア侵略後、サハラへの支配領域の拡張を目指すにあたり、非定住民の多いサハラの実態を把握するため、諸部族の生活拠点や交易ルートを念入りに調査した。そのなかでスーフは植民地経営に有用な存在とされ、1854 年のフランス軍による制圧後、仏領アルジェリア南東部の最前線に位置付けられた。本報告では、スーフを取り巻く人々の「移動」を伴う経済活動がいかなるもので、また一元的な領域支配を志向する植民地権力がそれをどのように認識したのかを分析する。この問いを検討することで、偏ったアフリカ認識が、およそ「移動」と不可分なサハラの人々の社会に何をもたらしたのか／もたらさなかったのかを示す。